

## マンガミニストーリー、ケリー篠沢氏証し

Q. ケリーさん、今朝は ICBC の礼拝にご参加いただき、ありがとうございます。まずは出身地と、幼少時どんな子供だったか、教えてください。

愛知県豊田市生まれで地元で育ちました。三河弁も問題ないですよ。幼稚園のころからマイペースの子供でした。今日一緒に来ている息子にも似た面があるんですが、頭の中に自分の世界があって他の子供たちとくらべると、ボーッとしてる子だったと思います。そんなわけでいじめられていたのですが、いじめられていることにも気づかない、そんな子だったと思います。小学高学年くらいからはまあうまく対処できるようになったと思いますね。というよりも反動で、かなり受けをねらう子供になってたかもしれないですね。

Q. 当時、マンガとはどのように関わっていましたか。

絵を描くのは好きでしたが、作品としてのマンガやアニメをみることはほとんどなく、自分で好きなものを好きなように書いていました。友達の間ではそういうことが喜んでもらえるので自分としても喜んで書いていましたね。

Q. 一般のマンガ雑誌等で仕事をはじめられた時の経緯など教えてください。

そうこうするうちに大学生になったのですが、ふと友人の持っていた「りぼん」という雑誌に読者投稿募集欄があるのに目がとまり、軽い気持ちで30ページほどの作品を投稿したところ、なぜかそこそこの賞に選ばれました。そして、すぐにデビューという話になりました。またこの頃はかなり積極的に人生を生きてやろうということで、海への恐怖を克服するためにキューバダイビングを、高所への恐れを克服するためにスキーに熱中し、スキーは準指導員の資格まで取ることになりました。

Q. その後、ニューヨークへ行かれるわけですが、当時どんな気持だったのですか。

デビューまではほとんど拍子ですすんだものの、画風が少女マンガというよりも少年マンガに近かったことと、もともとの性格が男っぽかったのか、当時はやっていた学園ラブコメディ路線にまったく乗ることができませんでした。ストーリー作りに苦慮していたところ、編集者さんにすすめられてホラーのディープな世界を描き始めてしまい、当然その手の取材もあるわけで霊的にはどんどん深みにはまっていく感じになってしまいました。育った家庭の影響もあり、私はどんどん劣等感のかたまりになっていき、リストカットを繰り返していました。結婚していた時期もありましたが、相手ともうまくいかず分かれることになってしまいました。ただその時期に前後して父親からア

ドバイスされたことを今でもよく覚えています。「お前は描く力を神様から授かっているんだ。だったら神の書である聖書を描いて、世界に発信しなさい。」父はまったくクリスチャンではありませんでしたが、聖書は読んだことがあり、このときの言葉が今実現していると思うと、主が父を通して私のことを見てくれていたのだなと思います。ただまだそのことはよくわからず、悶々としてマンガも書けず、ある日深いリストカットをして病院に運ばれた私に対して、海外に住む弟が「日本を出る」ことを提案してくれました。勉強してみたいこともあったので思い切ってニューヨークへ行きました。

Q. ニューヨーク滞在中に、イエスを知るわけですが、その時のお話をおねがいします。

ニューヨークへ行った頃は精神的にはかなり落ち込んでいました。向こうに着いてからグラフィックデザインの勉強をしながらすごしていたのですが、夜はよく出歩き、お酒の量も増え、かなりすさんだ生活をしていました。そんな時、同郷の名古屋出身のクリスチャンの日本人がルームメイトになり、彼女が通っているニューヨークの教会の話を聞くうちに行ってもいいかな、という気持ちになっていきました。そんなおり、クリスチャン作家三浦綾子さんのご主人、光世さんがニューヨークに来られるということで初めて話を聞きに教会の敷居をまたぎました。すばらしいお話でしたが、そこにいるクリスチャンの方々の微笑が気持ち悪く、というよりも、自分がそのような笑いを忘れてしまったことが腹立たしく、集会終了後にさっさと帰ってしまい、二度と行かないと決心しました。それでもそのルームメイトは帰国間際に三浦さんの小説を数冊、置いて帰っていきました。私は教会のことなど、とんと忘れていたのですが、ある日ランドリーに洗濯に行くとき、時間つぶしに読む本として、そのうちの1冊の持って行きました。読んでいるうちにこんな神様なら、自分も知りたいと思うようになり、当時知り合いになった日本人クリスチャンにさそわれるまま、別の教会へ行きました。しかし、やはり、教会の方とは話したくなく、終わるとすぐに地下鉄のプラットフォームに行き、帰りの電車を待っていました。すると線路にうごめくねずみが見えます。その暗闇の中にいる生き物がまるで自分のように思え、惨めな心になり、こう叫びました。「神よ、ほんとうにいるなら、私を救ってみよ。信じるから。」すると心が軽くなり、主がすぐそばにいてくださるように感じることができました。その時以来、イエスとともに歩む人生を送っています。

Q. 帰国される前に ICBC にメールをくださいましたが、ここを知るようになったきっかけは何だったのですか。

やはり、日本から来ていたクリスチャンが石原師の本を貸してくれた時、その最後に書いてある連絡先を見てメールし、すぐにお返事をいただきました。その後、セル集会にも参加させていただき、連絡を取るようになりました。

Q. 帰国後、今度は聖書に関わるマンガを描き始めるわけですが、当時どのような思いでその働きに進まれたのですか。

ある方に東京のマンガミニストリーの働きを紹介してもらい、マンガ「メサイヤ」を書く仕事をいただきました。その後、使徒行伝のマンガも描きましたが、最初の「メサイヤ」執筆の話が決まった時、東京からの帰りの新幹線の中で、父親から「癌で余命数週間という宣告を受けた」という電話を受け取り、ものすごいショックを受けましたが、その癌宣告のショックの中でも父が喜んでくれたこと、また病床でイエスを信じたこと、術後数ヶ月つづいた命の中で、このマンガ政策を励ましてくれたことが今も心に深く残っています。

Q. 今回のジェネシス・シリーズについてどんな点を見てほしいか、お話し下さい。

ジェネシス第1巻のお話をいただいて準備し始めた頃、生後一年にも満たない次男、ノアを乳幼児突然死症候群で失いました。その日もノアは元気いっぱいでしたが夕方少しぐずったので、普段はそばにおいて仕事をするところ、他の部屋で寝かせて仕事をしました。しばらくして様子を見に行ってみると息をしていません。あわてて救急車を呼びましたが、すでに遅くノアは天に召されました。「なぜ、あなたの仕事をしているのにこんな目に合わせるのですか！」この時は主に対して怒りをぶつけ、自分に対しても許せず、もう絶対に絵は描かない、と心に決めました。ところがノアの召天式の終わった夜、眠れない頭の中に子供の笑い声が響いてきました。そして子供の声で「ママ、絵を描いて。ゴスペルを歌って。」と呼びかけられたのです。するとその声はすぐに大人の声になり、「あなたは書きなさい。」という言葉が響きました。普通は親が一粒の種となって子を生かすはずなのですが、私の場合は息子が一粒の種となって地に落ちたのだ、と確信しました。ならば、それに親としてこたえる以外に選択の余地はありません。ジェネシスを描き始めました。その中で創世記を通しての福音のエッセンスを表現したつもりです。それをこどもたちに知っていただけたら、という思いです。

9. マンガミニストリーの今後については、どんな夢をもっておられますか。

マンガで世界中の人たちにイエスのすばらしさを伝えたい。創造の初めから黙示録にいたるまで聖書に貫かれている主の愛を皆さんにお伝えしたいです。